

話題①◆常盤公園ワークショップ

あなたの声を反映した公園に

平成22年春の完成を目指す常盤公園を、市の考え方だけではなく、地域の住民の皆さんの意見を反映した公園を整備していくため、公園のあり方を考える3回シリーズのワークショップがスタート。また、常盤小学校4年生は、この公園を飾るモザイクアートづくりを体験しました。

▼さまざまな価値観や考え方

常 盤小学校東側に広がる約1ヘクタルの土地。ここには、県内で2番目の防災公園として、常盤公園が作られることが決まっています。防災公園とは、一時避難場所にもなるとりわけ高い防災機能をもった公園。普段は普通の公園として利用されます。

ワークショップ初日の1月26日には、常盤公園近隣の人約40人が参加。進行と取りまとめ役は、岡山県立大学デザイン学部の熊澤貴之講師と斎藤美絵子講師です。

防災公園の説明を聞いた参加者は4班に分かれ各班で、備蓄庫や耐震性貯水槽、防火樹林帯などの防災設備について、好ましさ(3段階)と重要度(5段階)の度合いを決める作業に着手。「水道の復旧には時間がかかる」「木を植えると外から公園のなかが見えない」などの意見を交わしながら

判定しました。同様に、日常で使う遊具や芝生、野外ステージなどの設備についても班ごとに、「子どもの多い地区だから」「バリアフリーでないと」などと意見交換しながら、各班の見解がまとまりました。各班でまとめた見解が発表され、参加者全員がいろいろな意見を聞くことができていました。参加者の一人、植田幹隆さん(三輪)は、「自分の思いを言える機会に参加できてよかった。ここでの意見が反映された公園ができるのが楽しみ」と、話してくれました。

「さまざまな価値観や考え方があることを、参加者の人も分かったと思う。最終的に複数のデザイン案を提示できるよう、各班の意見が一致しているものとするでないものに分け、何を求めているか、その要素を探りたい」。次回は、公園の整備の方向性を考えると、熊澤さんは言います。

▼公園に愛着をもってほしい

モ ザイクアートで公園を飾ろうと、これから約2年かけて常盤小学校では、その制作に取り組みます。これは、公園への愛着をもってもらうこともねらいの一つです。その第一歩として、2月13日、4年生約90人がモザイクアートを知る体験をしました。今後、子どもたちは防災や公園について学び、原画を作り、実際に使うモザイクアートの制作をする計画です。



子どもたちが作ったモザイクアート作品は、大人のワークショップで披露されることになっている。進行役の2人は「こうした作業に子どもたちが関われば、防災に対する親の意識も高まり、防災力を高めることにもつながる」と話す



子どもたちは8×8の升目を白・青・黄・緑・赤の5色で塗り分け、その配色のとおりの色の本物のタイルを板に張ってモザイクアートを完成させた。子どもたちはにぎやかに話しながら、作業を楽しんでいた



各班でまとめた防災設備や日常使う設備の好ましさや重要度の度合いについて、班の代表が、そこに至った経緯も含めて説明した



進行役の熊澤さん(写真左端)が参加した班の話し合い。防災設備や日常使う設備について想定されるものはカード(右の写真)にして用意されていた。参加者は、それら一つずつについて、意見を出し合い、最後に「○」「×」の投票で好ましさや重要度の度合いを決めた



常盤公園

総社駅南地区土地区画整理事業のなかで整備される公園の一つ。この写真の場所に造られる。公園の西側には、常盤小学校と常盤幼稚園、北側には中央保育所が道路を挟んで隣接する



問い合わせ 区画整理課 (☎8303)